The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウィトゲンシュタイン : 「規則」と「私的言語」について
Author(s)	大石, 敏広
Citation	カンティアーナ. 1993, 24, p. 49-52
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66717
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

一九九二年度修士論文要旨

ウィトゲンシュタイン―「規則」と「私的言語」について

大石敏広

ソール・クリプキは、ウィトゲンシュタインの『哲学探究』における「規則の問題」（第一三八節～第二四二節）と「私的言語論」（第二四三節～第三六三節あたり）の箇所に関して画期的な解釈を提出したと言われている。それは、「規則の問題」の部分において、「ある人がある与えられた規則に従っているということはたんに、その規則に従っている人、そしてその人のみに関する事実によって分析されるべきであり、より広く彼は共同体の一員であるということに言及する必要はない」という「規則についての私的モデル」が否定されているのであり、それに続く「私的言語論」で主張されている「私的言語」の不可能性はこの一般的議論を踏まえた特殊な問題に過ぎない、というものである。本論では、まず「私的言語論」の考察を通じて、そして次にクリプキの「規則の問題」解釈それ自体を検討することによってクリプキ説の是非が問われる。

「私的言語論」の核心をなすのは次の箇所である。

次のような場合を想像してみよう。私は、ある種の感覚が繰り返し起こることについて日記を付けたいと思っている。そのため私はその感覚を「E」なる記号に結び付け、自分がその感覚を持った日には必ずこの記号をカレンダーに書き込む。――私がまず第一に言いたいのは、この記号の定義を述べることができないということである。――にもかかわらず、私は自分自身に対してはそれを一種の直示的定義として与えることができる！――どのようにして？ 私はその感覚を指し示すことができるのか。――普通の意味ではできない。だが、私はその記号を口に出したり、書いたりして、自分の注意をその感覚に集中する――それゆえ、いわば心の中でそれを指し示す。――しかし、何のためにそのような儀式をするのか。というのは、そのようなことは儀式であるとしか思えないからだ！ でも、定義は記号の意味を確定するのに役立つ。――ところで、そのことは正に注意力の集中によって行われる。なぜなら、そうすることによって私は記号と感覚との結合を自分〔の心〕に刻み付けているのだから。――もっとも「自分〔の心〕に刻み付ける」というのは、このような出来事を経過すれば、私が将来正しくその結合を思い出すようになるということでしかない。しかし、この場合私にはそ

の正しさについての規準などないのである。そこで人は、私にとっていつも正しいと思われることが正しいのであると言うかもしれない。そして、このことは、ここでは〈正しい〉ということについて語ることができないということでしかないのである。(『探究』第二五八節)

私的言語の規則とは規則についての印象なのか。――印象をはかる秤は秤についての印象ではない。(『探究』第二五九節)

こうした節に関してコリン・マッギンとA・J・エイヤーは次のような解釈を採っている。つまり、言語が言語であるためには、その言語を一貫して同一の対象に適用しているかどうかということに関して他人によるチェックが可能となるための公的な助け(公的規準)が必要である。「私的言語」にはこうした公的規準が存在しない。それゆえ「私的言語」(感覚言語)は言語たり得ない。自分自身の感覚を正しく同定するとはどういうことかという点がここで問題となっているのである。

しかし、マッギンがこうして解釈された「私的言語論」を支持するのに対して、エイヤーはこの解釈を根拠に「私的言語論」は誤りであると結論する。そう結論する理由はこうである。公的な対象の認識は結局は個人それぞれの感覚が与える証拠に基づいているのであるから、公的なものの同定と私的な感覚の同定との間には何らの差別もあり得ない。公的対象の同定がうまくいくと言うなら、当然私的感覚の同定も成功すると言える。そして、公的対象についての記憶は訂正可能であるという反論に対しては、私的感覚の記憶もまた訂正可能であると再反論できる。

前述の解釈を採るとするなら結果的にエイヤーの議論を認めざるをえないであろう。だが、この解釈は誤りであると私は考える。ウィトゲンシュタインが問題としているのは、私的感覚の同定についてではなく、私的感覚を指示すると言われる記号の意味についてなのである。「将来正しく記号と感覚との結合を思い出す」とは、ある記号が何を意味しているのかを将来正しく思い出すということである。例えばある人が、過去にある感覚を「e」と名付け、現在生じた感覚もまた「e」であると言うとする。ウィトゲンシュタインが取り上げているのは、この感覚は「e」であると言う場合に本当にその感覚は「e」なのかということではなくて、この感覚は「e」であると言う際に「e」という記号によって彼は自分が何を意味しているのかをどのようにして知るのかという点なのである。つまり、〈言語の規範性(規則性)〉がここで論点となっているのである。「私的言語」の場合、以前と同じ言語規則に正しく従っているということは「私的言語」の発話者個人の事実(いわゆる感覚そのもの、あるいはその感覚についての記憶)に基づいて確保されていると言われるであろうが、そのことこそが不可能なことであるとウィトゲンシュタインは論じているのである。ここ

において我々はクリプキとの接点を間接的に見出すことになった。

クリプキ説によればウィトゲンシュタインの議論は、「懐疑的議論」による「懐疑的パラドックス」の提示と、そのパラドックスに対する「懐疑的解決」の両者を含んでいる。「懐疑的議論」は簡単に言えばこうである。今までに一度も計算したことがない「六八＋五七」という式に対して私は「一二五」という答えを出す。なぜそうすべきか。なぜなら、私は「＋」によってアディションを意味していたからである。しかし、〈五七より小さな数に関してはアディションと同じ答えであり、それ以外は答えは「五」である〉というクワディションを私は「＋」によって意味していたのかもしれない。クワディションではなくアディションを私は意味していたのであるという私の確信を正当化する、私自身についての事実といったものが存在するのか。そのようなものは存在しないのである（「懐疑的パラドックス」）。

クリプキは、この議論に対する反論として提出されるかもしれない幾つかの議論について検討している。本論では、(1)傾性的（dispositional）分析（「＋」によってアディションを意味しているということは、任意の計算に対して和の答えを与える傾向性を有しているのである）、(2)独特の質を有し、内観によって我々の一人一人に直接的に知られている他に還元不可能な経験、(3)(2)よりももっと独特な状態（非経験的でプリミティブな心的事実）の三つが取り上げられた。第二点に関しては問題はなかった。ある言葉を聞いた時に私の心に浮かんでくるイメージ等の内的経験がその言葉の使用を私に指示してくれるのであるという考えをウィトゲンシュタインが批判していたことは周知のことである。第一点・第三点の立場を主張する論者は結局のところ、クリプキの議論が〈言語の規範性・規則性〉を問題としていたということをよく理解していないのである。マッギンのクリプキ批判にもそのような誤解があると思われる。さらに、第一点については『探究』の第一四九節・第一八五節・一八七節を、第三点については同第一九一節あたりから第一九七節までの箇所を検討することによって、マッギンのウィトゲンシュタイン解釈よりもクリプキの解釈の方が当を得ていると結論された。

この「懐疑的パラドックス」に対して「懐疑的解決」が与えられる。「懐疑的議論」によって、ある人があることを意味していたということに対応した、彼個人に関する確定的な事実はあり得ないという点が示された。だが、そもそも我々は、「規則に従う」ということに関する言明の「正当化条件」（問題の言明が主張され得る状況とその状況で主張された言明の持つ我々の生活中の役割・有用性）に注目しなければならない。そしてその「正当化条件」は個人が共同体と相互作用するものとして存在しているという事実（想定的事態も含め）を考慮することによって明らかになる。ある人が彼と関係する共同体が正し

いと見なすに十分な反応をすれば、その共同体はその人がある規則に従っていることを認め、彼を様々なコミュニケーション活動に参加させることになるわけである。また、こうした共同体的な在り方が実際にうまくいくということは、我々が相互に反応において一致しているというどうしようもない「生の事実」によって支えられているとクリプキは指摘する。我々は、例えばある計算をする場合に自分のやり方が正しいかどうかを共同体の他のメンバーと共にチェックしないし、そうする必要も感じない。が、実際に結果として我々は一般的に計算において一致する。

ウィトゲンシュタインが「共同体説」に対して反対であったということはマッギンが言う程にテキスト的に明らかなことではない。逆に、彼は「共同体説」を支持していたのではないかと思わせるような論述が見受けられる。ただ、ウィトゲンシュタインはこの問題について極めて慎重になっているということは事実である。しかし、私の考えでは、この「共同体説」を「懐疑的議論」との繋がりで考えることを忘れてはならないのであり、そしてウィトゲンシュタインの「規則の問題」と「私的言語論」について一つの明確な統一的構図というものを描き出しているという点でクリプキの「共同体説」は大いに興味深いものとなっているのである。

しかし、クリプキ説には次のような問題点がある。クリプキによる懐疑論的手法の援用の仕方は懐疑論的立場を圧倒的に強化するものであるという批判が考え得るが、それはもっともなことであると思われる。「懐疑的議論」の結果、「全ての言語は無意味であるという信じ難い、そして自己破壊的な結論が既に引き出されてしまっているのではないのか」という発言や、懐疑論者の主張は反駁できないということをまず認めた上で彼の議論に対して正面からでない解決を与えるという説明の仕方のうちにウィトゲンシュタインに対するクリプキの誤解が読み取れるかもしれない。「懐疑的議論」はすでに「懐疑的解決」において提示されている意味についての考え方を前提していると見るべきである。懐疑論的手法はそれ自身が一つの哲学的なものとして、意味を実体化する種々の哲学理論の論駁においてその力が発揮されていると考えるのがよいのではないかと思う。